

宇治大君の「枯れゆく」死の象徴性  
—『源氏物語』の「枯る」用例の検討を通して—

安道 百合子・佐野 みなみ

A Study on the Symbolism of Death in Uji no Ōkimi's "Kareyuku":  
An Examination of the Usage of "Wither" in The Tale of Genji

ANDO, Yuriko and SANNO, Minami

大分大学教育学部研究紀要 第47巻第2号

2026年3月 別刷

Reprinted From

RESEARCH BULLETIN OF THE

FACULTY OF EDUCATION

OITA UNIVERSITY

Vol. 47, No. 2, March 2026

OITA, JAPAN

## 宇治大君の「枯れゆく」死の象徴性

—『源氏物語』の「枯る」用例の検討を通して—

安道 百合子  
 (大分大学教育学部言語教育講座・古典文学)

佐野 みなみ  
 (大分大学教育学部令和六年度卒業生)

【要旨】 『源氏物語』宇治大君の死は、薫の視線を通して「ものの枯れゆくやうにて」と描かれている。この表現の特異性を明らかにし、「枯れゆく」が担う象徴性について、物語内の「枯る」用例の検討を通して論じた。第三部における「枯る」用例には、枯れつつある継続をあらわし大君の象徴となる例がある。また和歌においては、「離れゆく」との掛詞として機能する。従って、薫にとつては、目の前に残る身体がありながら命が尽き自分から離れていく恋人を繋ぎとめ得ない無念さをあらわし、後に「人形」を求める契機となった。一方、婚姻拒否の姫君である大君の内面に寄り添って見るならば、草木は老いゆく身体を持つ自身の生の象徴であるとともに、枯れゆく植物が春の再来に希望を見るように、結婚しないままの死別は薫との精神的愛情の永続性の象徴として機能したと考えられる。

【キーワード】 源氏物語 宇治大君 他界表現  
 枯れゆく

### はじめに

『源氏物語』の登場人物が他界する際の表現には、特別に選ばれた表現がある。稿者(安道)は、以前、紫の上の他界表現について、その固有性と普遍性とを論じたことがある<sup>注①</sup>。本稿では、宇治大君の他界表現について、その特異性を明らかにし、「枯れゆく」表現の象徴性について論じたい。

『源氏物語』第三部に登場する宇治大君は、薫の恋情を拒絶し続け、ついには結ばれぬまま病に倒れ亡くなる。その臨終場面は、薫の視線を通して次のように描写されている。

世の中をことさらに厭ひ離れねとすめたまふ仏などの、いとかくいみじきものは思はせたまふにやあらむ、見るままにもの枯れゆくやうにて、消えはてたまひぬるはいみじきわざかな。(総角⑤三二八)<sup>注②</sup>

物語内で「枯れゆく」という表現を用いて、いま目の前で亡くなるうとして描く人を描写する用例はこの一例のみで、他の物語作品においても見られない。そこで、人の死と「枯れゆく」という表現の関係性について、また、その表現を婚姻拒否の女君である大君に用いたこととの意義を追究したい。

### 一 『源氏物語』の他界表現

まず、『源氏物語』の他界表現について簡単に確認しておきたい。『源氏物語』の主要人物の命が尽きる場面では、「失せ給ふ」「絶え入り給ふ」などの表現が多い。ところが、藤壺宮、柏木、紫上、宇治大君の四人の臨終場面は、それに加えて、亡くなる様子を人以外の何らかにたとえる描写を加えている。次のごとくである。

・藤壺…灯火などの消え入るやうにてはてたまひぬれば（薄雲②四四七）

・柏木…泡の消え入るやうにて失せたまひぬ（柏木④三一八）

・紫上…まことに消えゆく露の心地して限りに見えたまへば…略…明けはつるほどに消えはてたまひぬ（御法④五〇六）

・宇治大君…ものの枯れゆくやうにて、消えはてたまひぬるは

かつて石田讓二氏は、これらが「歌語」に由来するとし、「それは単なる即物的な比喻でもなく、単に言葉飾つたといふだけのことでない。そこには、今までの散文にはなかつた、文章としての飛躍的な豊かさがあつた。」とし、この四例を「相当のいはば手間をかけた言い方」と評した<sup>注③</sup>。また、安藤享子氏は、「消ゆ」が「死ぬ」を意味する用例十六例の分析を経て、紫上、大君の命がつかける瞬間に「消えはつ」が用いられたことについて、「この二人の死が最も美しく、かつまた最も深い悲しみを後に残すことを意図していたであろう」と述べた<sup>注④</sup>。実際、紫上の他界表現の場合、「露」が和歌において、はかないものを象徴したり涙の喩となることは自明のことのように考えられがちであるが、実は、紫上ただひとりに与えられた表現である。加えて、他界場面のみならず、若紫巻の登場時から、「露」が、紫上の生の象徴となるための手続きを物語は丁寧に踏んでいたと考えられる。翻つて宇治大君の場合はどうだろうか。

他の三例と、とくに紫上の場合と比べると、どのような違いがあるだろうか。他の三例の死の描写に共通することは、「灯火」も「泡」も「露」も、生物でない物質であるという点である。一方、大君の場合には、「ものの枯れゆく」と書かれており、実質的には、草木の消滅、いわば生物の消滅に喩えていると言えよう。従来、「見る見るうちに草木の枯れてゆくようにして<sup>注⑤</sup>」と訳され、折しも中冬（ちゅうとう）十一月であるから、自然の滅びにあわせて大君の死を表現していると解釈

されている。

また、「火」「泡」「露」の消滅は、眼前から消えたように、触れることも感じることも不可能となるものであるが、「枯れゆく」は厳密にいうと草木の生命の消滅の過程であり、「枯れ」たあと草木は物体として目の前に残る。物質の消滅と状態の消滅と言ひ換えることができようか。この違いは大きい。現実世界における人間の死に近いのは、言うまでもなく大君の場合である。人間の生命が失われても肉体はすぐには消滅しないからだ。そう考えると、藤壺、柏木、紫上の死の表現はファンタジックであり、より美化されているとも言える。

## 二 「枯る」用例の検討

『源氏物語』内の「枯る」用例は、下二段活用動詞「枯る」のほか、形容動詞「枯れ枯れなり」、複合名詞としての「木枯（こがらし）」「霜枯れ」を含めると三十一例ある<sup>注⑥</sup>。以下に、用例番号を付して掲げ、当該語彙に傍線を付した。また、和歌のなかに含まれる用例は、用例番号の上に、「歌」と記した。

### 【第一部】

歌1あらし風ふせぎしかげの枯れしより小萩がうへぞ静心なき（桐壺①三四）

2木枯に吹きあはすめる笛の音をひきとどむべきことの葉ぞなき（帚木①七九）

3空のけしきいとあはれに、御前の前栽枯れ枯れに…（夕顔①一八七）

4霜枯れの前栽絵にかけるやうにおもしろくて（若紫①二五八）

5霜枯れの前栽見たまふほどなりけり（葵②五五）

6 枯れたる下草の中に、竜胆、撫子などの咲き出でたるを折らせた  
まひて、(葵②五六)

7 草枯れのまがきに残るなでしこを別れし秋のかたみとぞ見る (葵  
②五七)

8 一日の花なるべし、枯れてまじれり。(葵②六五)

9 御前の五葉の雪にしをれて、下葉枯れたるを見たまひて、(賢木②  
九九)

10 かげ広みたのみし松や枯れにけん下葉散りゆく年の暮かな(賢木  
②九九)

11 木枯の吹くにつけつつ待ちし間におぼつかなさのころもへにけ  
り(賢木②一二七)

12 次々の人も、さるべきかぎりは、もとの官還し賜り世にゆるさる  
るほど、枯れたりし木の春にあへる心地して、いとめでたげなり。

(明石②二七三)

13 九月晦日なれば、紅葉のいろいろこきませ、霜枯れの草むらむら  
をかしう(関屋②三六〇)

14 枯れ枯れなる前栽の心ばへもことに見わたされて、…(朝顔②四  
七二)

15 枯れたる花どもの中に、朝顔のこれかれに這ひまつはれて(朝顔  
②四七五)

16 あひ心地よげに声いたう枯れてさへづりみたり。(玉鬘③九五)

### 【第二部】

17 霜枯れわたれる野原のままに、馬、車の行きちがふ音繁く響きた  
り。(若菜上④九三)

18 見るかひ多かる姿どもに、いと白く枯れたる萩を高やかにかざし  
て、…(若菜下④一七二)

19 時しあればかはらぬ色にほひけり片枝枯れにし宿の桜も(柏木  
④三三二)

20 (大将は、)花の枝の枯れて落ちたるを取りて、見せたてまつり  
て招きたまへば、走りおはしたり。(横笛④三六四)

21 人のけはひいと少なう、木枯の吹き払ひたるに、(夕霧④四四八)

22 枯れはつる野辺をうしとや亡き人の秋に心をとどめざりけん(御  
法④五一七)

### 【第三部】

23 老を忘るる菊に、おとろへゆく藤袴、ものげなきわれもかうなど  
は、いとすさまじき霜枯れのころ…(匂兵部卿⑤二七項)

24 「ただ今の空のけしきを、思し知らぬ顔ならむも、あまり心づき  
なくこそあるべけれ。枯れゆく野辺もわきてながめらるるころに  
なむ」(権本⑤一九三)

25 見るままにもの枯れゆくやうにて、(総角⑤三二八)

26 霜にあへず枯れにし園の菊なれどのこりの色はあせずもあるか  
な(宿木⑤三七九)

27 ことさらびてももてなさぬに、露を落とさで持たまへりけるよ  
とをかしく見ゆるに、置きながら枯るるけしきなれば(宿木⑤三  
九五)

28 消えぬまに枯れぬる花のはかなさにおくるる露はなほぞまされ  
る(宿木⑤三九五)

29 木枯のたへがたきまで吹きとほしたるに…(宿木⑤四六一)

30 枯れ枯れなる前栽の中に…(宿木⑤四六五)

31 木枯の吹きにし山のふもとはたち隠るべきかげだにぞなき(手  
習⑥三五〇)

物語の地の文における「枯る」用例が、用例25大君の臨終場面の直喩表現を除いてほぼ風景描写であるのに対し、何らかの喩として機能していると考えられるのが和歌の用例である。物に寄せて思いを陳ぶいわゆる「寄物陳思」の発想は『万葉集』以来あり、初の勅撰集『古今和歌集』においては仮名序で「心に思ふことを見るもの聞くものにつけて言ひ出せるなり」と述べた。『源氏』成立期までの和歌の伝統において、景物と人事は緊密に結びついている。

さて、第一部に四例、第二部に一例(計五例)ある和歌のうち、人の死にまつわる、いわゆる哀傷歌は四例で、用例番号1・7・10・19である。そのうち、用例1・10・19の三首は、明確に、死者を「枯れ」たものとし、遺された者をも植物になぞらえる点が共通している。哀傷歌四例を、詠者とともに再掲する。

1 (桐壺更衣母) 荒き風ふせぎしかげの枯れしより小萩がうへぞ静心なき

7 (源氏) 草枯れのまがきに残るなでしこを別れし秋のかたみとぞ見る

10 (兵部卿宮) かげ広みたのみし松や枯れにけん下葉散りゆく年の暮れかな

19 (夕霧) 時しあればかはらぬ色にほひけり片枝枯れにし宿の桜も  
用例1は桐壺更衣の死後、帝が命婦を遣わして見舞った贈歌に対し、更衣母が答えた歌である。亡き更衣を、「あらし風ふせぎしかげ」荒い風を防いだ親木に、遺された皇子(光源氏)を「小萩」に喩えている。

用例10は桐壺院の崩御後の歌で、院を木陰が広く頼もしい「松」に、そして、松を頼みにしていたゆかりの人々を「下葉」に喩えたうえで、「散りゆく」と散り散りになる様子を悲しんでいる。また用例19は、夕霧が亡き友人柏木の妻を見舞う歌である。「片枝」という表現によって「枯れ」た柏木を惜しむとともに、夫婦の残されたもう一方、柏木

の妻にも思いを寄せる歌になっている。以上三例は、既に諸注にも指摘があるとおおり、亡き人を「枯れ」た植物に喩え、遺された者をそれに対応する植物になぞらえて詠んでいる。すなわち、「枯る」が人の死の喩として機能しているのである。

残る用例7は、葵の上の死後に源氏が詠んだ和歌である。諸注では、葵の上を「別れし秋」に喩え、そのかたみとしての遺児夕霧を「なでしこ」に喩えたものと解釈されている。葵の上が亡くなったあとの荒涼とした景が「草枯れのまがき」である。「草枯れのまがき」そのものを、葵の上の喩とすることには無理があるが、「草枯れ」の景は秋が過ぎ去ったことを視覚的にとらえた景であり、しかも「まがき」がなでしこを含む植物を庇護するものであることを考えれば、用例1に通じる発想を読み取ることができよう。

さらに、この前後の実景を描く用例5・6・8は、一連の葵の上追悼の文脈で読むことができると考えられる。すなわち、前後の用例は、風景描写でありつつも、登場人物の心象を描くことに寄与していると考えられるのである。

用例5は、葵上の死後、四十九日まで左大臣邸に留まる源氏のもとに、葵上の兄中将がやってきて無聊をなぐさめる場面にある。

時雨うちしてもあはれなる暮つ方、…略…君は、西のつまの高欄におしかかりて霜枯れの前栽見たまふほどなりけり。風荒らかに吹き時雨さとしたるほど、涙もあらそふ心地して、(源氏)「雨となり雲とやなりにけん、今は知らず」とうち独りごちて頬杖つきたまへる御さま、女にては見棄てて亡くならん魂かならずとまりなむかしと、(葵②五五)

折しも初冬の時雨があはれを誘う頃合いである。源氏は、霜枯れの寂しい庭を見ている。そこへ風が荒々しく吹き、風に運ばれてきたかのように冷たい時雨が急に降りかかる、すると時雨に誘われて涙が競

いこぼれるような気持がして歌を朗じる、という一連の流れは、実際の風景に導かれつつ、源氏の心が亡き妻を悼む思いに急激に傾いていく流れをあらわしている。さらに波線部、「雨となり」云々は、『全唐詩』劉禹錫の七言絶句、愛人に死別しての作に由来する。

続く用例6は、用例7歌の直前にある。用例7歌を含んで前後の文章を提示する。

枯れたる下草の中に、竜胆、撫子などの咲き出でたるを折らせたまひて、中将の立ちたまひぬる後に、若君の御乳母の宰相の君して、

「草枯れのまがきに残るなでしこを別れし秋のかたみとぞ見  
る

匂ひ劣りてや御覧ぜられるらむ」と聞こえたまへり。げに何心なき御笑顔ぞいみじうつくしき。(葵②五六)

用例7歌を宰相の君に命じて大宮に届けるいきさつを描いている。源氏は、霜枯れの下草のなかに、竜胆や撫子が咲き出ているのを見つけて折り、その「なでしこ」という花名が想起させる「撫でし子」にちなんだ歌を贈ることで、葵上の母親であり、生まれた子の祖母となる大宮を慰めようとする。従って、和歌のあとに、「匂ひ劣りて…このなでしこが亡き母親より見劣りすると御覧になりますか」と言葉添えたのであり、かつ、物語はその直後に無心な若君の笑顔がたいそうかわいらしいことを加えた。霜枯れの下にあっても花の色香を残す実際の植物の撫子に、遺された愛らしい子をなぞらえたわけである。用例6は、用例7歌が実景に基づいていることを説明する文脈にあり、詠み手と受け取り手の双方が見ている撫子の色香を想像させるものである。一連の場面を葵の上追悼の文脈で読むことは、主に漢詩文の引用の方面から言及されているが<sup>注⑥</sup>、ここでは、源氏詠の「草枯れ」に着目し、実景の「枯れ」た庭を二度に渡り言及していることを確認し

た。

さらに用例8は、このときの撫子が枯れて、源氏が左大臣邸に残した反故の中に混じっている景である。これは、左大臣邸から婿であった源氏が服喪期間を過ぎて去り、左大臣が寂しさを深めながら源氏の残した手習い歌などを眺めている場面にある。

また、「霜の華白し」とある所に、

君なくて塵積もりぬるとこなつの露うち払いいく夜寝ぬら  
む

一日の花なるべし、枯れてまじれり。(葵②六五)

直前の源氏の和歌には、撫子の異名「とこなつ」が詠みこまれている。「とこなつ」という呼称を用いる場合は「床」の発想から、愛しい亡き妻を喩える。これは、源氏の、妻を失ってから塵がつもる床で、露、すなわち涙を払いながら幾夜過ごすのだろうという哀傷歌である。その反故に混じって、先に大宮に届けた植物の撫子が枯れているのである。ここでは、妻の喩として機能する<sup>注⑧</sup>。

このように、用例7の「枯る」が葵上の死を視覚的にとらえた用例であることに伴って、その前後の場面においても、実景を描きながら、時に死に遅れた人の心象を描くことに寄与しているわけである。同様に、用例9も10歌を導くために、詠者の目に写る実景を描いた例である。

あと一例ある和歌用例11は、「木枯らし」にちなんで、朧月夜と呼ばれる女性が、源氏に便りの無さを責める歌である。実景の木枯らしが吹いていることは無論、木枯らしが「木の葉」を散らすものであることから、「言の葉」が届かないことを暗に示している。

さて、一部二部の地の文において、ほかに、人事を喩える例としては、用例12がある。源氏が須磨流謫という不遇な状況を脱し帰京して再び要職に就いたことを、「枯れたりし木の春にあへる心地」とした。

現代でも使う「冬の時代」の喩につながる発想である。

それ以外の用例では、「木枯らし」「霜枯れ」は晩秋の趣きをあらわすのにふさわしい事象として描かれ、「枯れ枯れ」の風景も、晩秋から初冬の物寂しさをあらわす季節の景として描かれているようである。寂しさでありつつも、4「絵にかけけるやうにおもしろく」13「霜枯れの草むらむらをかしよう」14「枯れ枯れなる前栽の心ばへもことに見わたされ」のように、風情ある景色として賞美する認識も共通する。哀傷歌の「枯る」が死者を悼みつつも、遺された者に思いをはせるように、秋から冬にかけて「枯れ」という植物の自然な営みに寄り添ってあはれを感じつつも、そのあはれを賞美するのは、いずれ季節がめぐりその次にやってくる命の息吹きへの期待を孕んでいるからであるう。

### 三 第三部の「枯る」用例

第三部の「枯る」用例においても、直接人の死を表す例は二例ある。いずれも和歌のなかの用例で、26と28である。詠者とともに掲げる。

26 (今上帝) 霜にあへず枯れにし園の菊なれどのこりの色はあせずもあるかな

28 (宇治中君) 消えぬまに枯れぬる花のはかなさにおくるる露はなほぞまされる

用例26は、今上帝が薫と女二宮との縁組を画す際に詠まれた歌で、「枯れにし園の菊」は母女御に死に別れた女二宮を喩えている。第一部の1・7の歌の発想と同様に、「枯れにし園」は皇女を守り育ててきた母女御を想起させ、また、「のこりの色はあせず」ということで、母を失った宮ではあるが残された女二宮が美しく育っているという意味が含まれている。用例28は、大君死後、彼女への執着を断ち切れない

薫が、中君に対して、大君によそえて見たいと詠みかけた歌に返した、中君の切り返し之歌である。「枯れぬる花」を大君に見立て、「おくるる露」を自身に喩える。はかなく枯れてしまった朝顔に大君を喩え、そこに残された露に自らを喩えることで、自身のはかなく頼りない身の上を嘆くのである。

ところで、この二例は、哀傷歌ではない。今上帝は、薫に対し、女二宮との結婚を勧めたいが故に詠みかけた歌であり、中君は、大君を失った薫の恋情が自分に向かうのを避けたいが為に切り返した歌である。いわば、遺された人々が、それでも続く人生の歩みを進める途中で、詠まれた歌である。

さらに、第三部の「枯る」用例には、一部二部とは異なる特徴が見られる。動詞「枯る」の場合、一部二部の用例は、過去の「き」や完了「ぬ」「たり」に接続したり、「枯れて」「枯れはつ」など、枯れてしまった状態を表すものばかりであった。ところが、第三部には、連体形27「枯るる」、動詞「ゆく」に接続する24・25「枯れゆく」のように、現在枯れつつある状態を表わすものがあるということである。そのうちの一例はいうまでもなく大君の亡くなる時の描写である。

では、用例27「枯るる」用例を見ておきたい。これは、薫が扇に置いた朝顔の花を差し入れて歌を詠みかける場面にある。またこの薫歌に応じたのが28中君の歌である。

折りたまへる花を、扇にうち置きて見ぬたまへるに、やうやう赤みもて行くもなかなか色のあはひをかくし見ゆれば、やをらさし入れて

〈薫〉よそへてぞ見るべかりける白露のちぎりかおきし朝顔の花ことさらびてしももてなさぬに、露を落さで持たまへりけるよとをかくし見ゆるに、置きながら枯るるけしきなれば、

〈中君〉消えぬまに枯れぬる花のはかなさにおくるる露はなほぞ

まされる

何にかかれる」といと忍びて言もつづかず、つつましげに言ひ消ちたまへるほど、なほいとよく似たまへるものかなと思ふにも、まづぞ悲しき。(宿木⑤三九五)

時は、前年十一月の大君没後、翌秋八月を迎えた頃合い、薫は大君を追慕し続けている。そんななか匂宮の縁談を聞いた薫は、中君を慰めようと訪れる。心中には中君への同情に恋情が入り混じる。かつて大君が勧めた自分と中君との縁談を断った後悔、中君が匂宮妻に収まったゆえの未練、大君似の妹だからこそその執着などである。

さて、薫が選んだ花は朝顔である。花々のなかで、ことさら朝顔に目をとめた理由を、「常なき世にもなずらふるが、心苦しきなめりかし。」(⑤三九〇)と語り手は推量する。露が消えない間ほどのはかない命の花だという認識が、大君を亡くし憂愁のなかに留まる薫に、手折らせたのである。引用場面では、扇に置かれた花が露によってしだいに赤みを帯びてゆく。薫の歌は、「露」を大君に、「朝顔の花」を中君になぞらえ、露が残してくれた朝顔を代わりに見ればよかった、とやや露骨なまでに中君への恋情をしのばせつつ、はかなさを嘆いている。ところがその、露を残して切り取られた朝顔は、扇の上で、見る見るしぼんでいったのだらう。それが、用例27「枯るる」けしきである。薫は、中君に朝顔を差し出し、露に見立てた大君が花の赤みを増し、遺された朝顔になぞらえた中君と自分との縁を訴えかけたわけだが、中君はそれを絶妙に詠み換えて、姉大君を「枯れぬる花」に、自分をまだ残る「おくるる露」にたとえて、切り返したのである。

完了の形で亡くなった人を「枯れ」たと表わしたという意味では、この歌は、他の和歌用例と同じであるが、この場合は、目の前で諭えられた植物が変化し続けるのを詠者が見た結果詠まれたという点で特異である。中君の意識においては、眼前の朝顔が枯れる様子が、大君

の死を象徴的に表わしているのとらえたであろう。加えて言うならば、露と朝顔という歌材の何とはかないことか。哀傷歌の1・7・10・19と、26歌においては、「枯れ」た亡き人と残された人との関係は、親子、または夫婦という強い紐帯を感じる関係であった。(時代が王朝とすることを考慮すれば帝と臣下を親子に準じる関係にひとまず見ておいてもよいだろう。)草木が枯れても、次の季節にまたその種をひきつぐ命が芽生えるように、亡くなった人を「枯れ」たと表わしていても、そこには、強い縁をひきつぐ人がいる。対して大君を失った薫は、夫ではないし、中君は、子ではない。実際薫は、結婚していないゆえに、喪服を着ることができないことを嘆いている。この喩は、深い憂愁にとらわれ続ける薫が選ぶ歌材としても特徴的である。

次に、用例24を確認する。大君の死の場面以外で「枯れゆく」という表現があるのはこの例のみである。宇治八宮の忌が明け、匂宮が宇治の姫君たちに手紙を送る場面である。

御忌もはてぬ。限りあれば涙も隙もやと思しやりて、いと多く書きつづけたまへり。時雨がちなる夕つ方、

〈匂宮〉「牡鹿鳴く秋の山里いかならむ小萩がつゆのかかる夕暮ただ今の空のけしきを、思し知らぬ顔ならむも、あまり心づきなくこそあるべけれ。枯れゆく野辺もわきてながめらるるころになむ」などあり。(権本⑤一九三)

弔問の次の段階として、秋の風情を分かち合いたいという心寄せの手紙である。とはいえ、「時雨がち」な時節を選び、和歌に「小萩がつゆ」を詠みこんで、亡き八宮に遺された子である姫君たちの涙を思いやる。そこにある「枯れゆく野辺」は、晩秋の実景であり、八宮を失った宇治の景色である。匂宮は、姫君たちの悲しみに寄り添いつつも、「牡鹿鳴く」と恋人を呼ぶ鹿の声を詠みこんで、心寄せの気持ち贈っているのである。さらに添えた言葉の「枯れゆく野辺」は、次の具

平親王の和歌の引用であり、風情を賞美する気分への転換を推し進めている<sup>注⑨</sup>。

526 鹿のすむ尾上の萩の下葉よりかれゆく野べもあはれとぞみる

(『新千載和歌集』巻五・秋下題しらず 中務卿具平親王)

「枯れゆく野辺」は、和歌において、秋の自然の景物が次第に枯れていく変化の様相と、その風情をあらわしている。

#### 四 和歌の伝統のなかでの「枯る」表現

あらためて、確認しておきたいのは、「枯れゆく」が和歌的表現であるということだ。『源氏物語』の「枯る」用例のなかで、人の死を象徴的に表わしたのは、すべて和歌の用例であり、大君の死の場面以外の「枯れゆく」は引き歌表現であった。

いま、『古今集』の「枯る」用例を見ると、哀傷部には「枯る」の用例はない。四季部に五例(夏一・秋二・冬二例)と恋部に七例(恋四に三例、恋五に四例)あり、恋部の歌は、「799 思ふともかれなむ人をいかがせむあかずちりぬる花とこそ見め」のように、掛詞とまで言えないまでも「枯る」を連想させる歌を含めると、すべて「離る」の意味を持つ歌である。なお、「枯れゆく」については、次の二首がある。

704 さと人の言は夏ののしげくともかれ行くきみにあはざらめやは  
(古今集・卷一四・恋四)<sup>注⑩</sup>

790 時すぎてかれゆくをのあさぢには今は思ひぞたえずもえける  
(古今集・卷一五・恋五・こまちがあね／あひしれりける人のやうやくかれがたになりけるあひだに、やけたるちのはにふみをさしてつかはせりける)

704 番歌は、上句の「しげく」に噂が多い状態と夏草が繁茂する様子の両義を持たせたことから、下句の「かれ行く」が「枯れ」を連想

させる。790 番歌は枯れ行く浅茅に、遠ざかる恋人を重ねている。また、平安前期までの歌の例としては、以下の歌がある。

2192 くさもきもふけばかれゆく秋かぜにさきのみまさるものおもひのはな  
(『古今和歌六帖』第四・恋・さふの思・みつね)

317 みしよりもいとどかれゆくしらぎくのうつりごころは花もありけり  
(『大式高遠集』ありし女のをとこにつきてさとにありしに、十月ばかりうつろひたる菊につけてやる)

96 はなすすき葉わけのつゆやなにかかくかれゆく野べにきえとまるらむ  
(『紫式部集』ものやおもふと、人のとひたまへる返事に、なが月つゝもり)

276 のべみればをばながもとの思草かれゆく程になりぞしにける  
(『和泉式部集』)

注目されるのは、紫式部詠であろう。夫の藤原宣孝の死後詠んだとされている<sup>注⑩</sup>。いずれの歌にも共通するのは、秋の草木の「枯れゆく」景に、恋愛対象が「離れゆく」様子を重ねていることである。植物の命の消滅に、恋の終わりを予感させる歌になっている。一方、草木の「枯れ」る状態は必ずしも物事の終わりを示すとは限らない。先の『古今集』790 番歌の次に置かれる伊勢の歌を引用する。

791 冬がれのべとわが身を思ひせばもえても春をまたましもを  
(『古今和歌集』巻一五・恋五・伊勢／物おもひけるころ、ものへまかりけるみちに野火のもえけるを見てよめる)

これも、「離れ」ていく相手との恋愛の終わりを詠んだ歌である。自身を「冬枯れの野べ」とするならば、野焼きによって春の再来を待つように、「思ひ(火)」を燃やして春を待ったであろうにと、失った恋への追憶を詠む。反実仮想の歌なので、詠者の実態は、春の再来を待ちうる状況では決していないわけだが、なぞらえられた自然界にあっては、枯野は野焼きによって再生する。つまり、「枯る」は、草木の死と

「離る」の連想から、人との別離や物事の終末の連想を生じさせる一方で、春の再来、再生の希望を連想させるものともなり得るのである。

では、なぜ大君の死には「枯れゆく」表現が用いられたのであろうか。先行研究において漢籍引用の観点からの指摘はすでにされているところだが、本稿では、歌語としての意味に着目する<sup>注⑩</sup>。

まずは、「枯れゆく」が和歌において、恋愛の終わり「離れゆく」意味を持つ言葉であったことに由来するだろう。大君は薫との婚姻を拒み続け、結ばれることなく亡くなった。その死は二人の恋愛の終わりを意味する。次いで、この場面が、薫の視点で描かれていることが重要であろう。「枯れゆく」というのは、状態が変化しつづけている様子である。この変化を見続けたのが薫である。大君は、あたかも、後に、朝顔に擬えられたように、薫の眼前で、「見るままに」死にむかつて変化していったのである。その表現は、大君の死を受け入れられない薫の心情や喪失感に焦点を当てる。経過や進行を表す「ゆく」に接続することにより、目の前の大君が「離れゆく」、永遠に手に入らない存在になりつつあるのに、それを引き止めることができない薫の無力さを強く感じさせる表現になっている<sup>注⑪</sup>。

さらに言えば、既に述べたように、「枯れ」た植物は、「露」のように消えて眼前から無くなるものではないという点だ。生命は消滅するものの、死後の身体は残っている。大君の死の前後には、見つめる薫を描いて、「中に身もなき雛を臥せたらむ心地して（総角⑤三二二六）」とあり、「隠したまふ顔も、ただ寝たまへるやうにて、変りたまへるところもなく、うつくしげにてうち臥したまへるを、かくながら、虫の殻のやうにても見るわざならましかばと思ひまどわる（総角⑤三二一九）」という表現が見られる。すなわち、薫の目を通して描かれた大君の身体は、「枯れゆく」死によって命は消滅しつつも、生前の美しい容姿を保ったままであり、あたかも魂を失った「人形」のように見なされる。

薫の視線を通して描かれた「枯れゆく」死は、薫の喪失感に焦点を当てた結果、現実的な植物が枯れしおれるという状態の変化を薫に認めさせなかったのである。これは、後に、大君の「人形」を作ることになり腐心する薫の行動につながっていくし、物語全体を俯瞰するならば、浮舟の登場を予感させる表現になっているとも言えよう<sup>注⑫</sup>。大君の「枯れゆく」死のあとの、春の再来になぞらえうる希望を、薫は「人形」に見ようとしたのである。

## 五 大君の結婚拒否の心象風景

最後に、大君が結婚拒否の姫君であることとの関連について考察したい。

大君の結婚拒否の理由を、池田節子氏は「簡単に述べるならば、はじめは、後見の不在と薫への劣等感、匂宮と中君の結婚を経験してからは、愛の永続性への絶望が、それに加わるといえよう。大君の、男の愛への不信感は、中君の結婚によって、大君自身が成長して導き出されてきたもので、拒否の理由として本質的な変化であった。」とまとめ、外的要因から内的要因への変化を指摘している<sup>注⑬</sup>。確かに、大君の結婚拒否の根本にあるのは、八宮の遺言であった。「いちじるくいとほしげなるよそのもどきを負はざらむなんよかるべき（椎本⑤一八五）」という父の言葉を頑なに受け止めた大君は、当初、薫の恋情の訴えに対して「思わずにもものし」（椎本⑤二二〇）と思うほどである。ところが、総角巻に至り、八宮一周忌の準備に宇治を訪れた薫が、再度大君に思いを伝える場面で幾分の変化が見える。大君は薫を受け入れず、二人は実事なきまま朝を迎えるが、このときの大君の心情は実に複雑である。

この人（薫）の御けはひありさまの疎ましくはあるまじく、故宮

も、さやうなる心ばへあらばと、をりをりのたまひ思すめりしかど、みづからはなほかくて過ぐしてむ、我よりはさま容貌も盛りにあたらしげなる中の宮を、人並々に見なしたらむこそうれしからめ、人の上になしては、心のいたらむ限り思ひ後見てむ（総角⑤二四〇）

薫の人柄や器量を疎ましくはないと好意的な自身の心を認めつつも、傍線部にあるように、薫の相手としては、姿も器量も若盛りでもつたいないほどの中君がよいと考える。父宮という後見不在の大君が、中君の後見となることに自身の役割を見出だすその理由には中君に対する劣等感がある。さらに薫の「恥づかしげに見えにくき気色」（⑤二四〇）に気後れする気持ちも加わって、自分は独身でよいと考える。このあと、薫の計画で、中君は匂宮と結ばれるが、女房たちが喜び着飾って匂宮の来訪を待つ姿を見る大君の視線は冷やかである。

盛り過ぎたるさまどもに、あざやかなる花の色々、似つかはしからぬをさし縫ひつつ、ありつかずとりつくろひたる姿どもの、罪ゆるされたるもなきを見わたされたまひて、姫宮、我もやうやう盛り過ぎぬる身ぞかし、鏡を見れば、瘦せ瘦せになりもてゆく、おのがじしは、この人どもも、我あしとやは思へる… わが身にては、まだいとあれがほどにはあらず、目も鼻もなほしとおぼゆるは心のなしにやあらむ、とうしろめたう（総角⑤二八〇）

老いた女房たちの姿にわが身を重ね、鏡に映るやせ細った自身の姿に老いを感じる。さすがにあれほどひどくはないと思つた直後にその心をうぬぼれかと疑う。自虐的なまでに、自身の容貌を卑下する大君が描かれる。婚姻拒否の理由が、父の戒めや後見不在という外的要因から、内的要因へ変化する過程で、彼女は、自分の「老い」という容貌の変化を強く自覚している。このことは、彼女の生の象徴が、その場から存在そのものが消滅する「露」ではなく、枯れる草木であるこ

と大きく関わりと考える。

その後、大君の婚姻拒否の気持ちは、中君の結婚生活と苦悩を間近に見ることによって、愛の永続性への絶望へと深まっていく。重篤になつた大君の心中思惟は「かたちをも変へてむ、さてのみこそ、長き心をかたみに見はつべきわざなれ」（総角⑤三二三）と書かれる。病床にあつてもはや物理的な隔てがないほどの至近距離にいる薫との関係に望むことは、尼になつても今の関係を保つことなのである。逆に言えば、大君には、ここに至るまで精神的愛情を変わらず保ち続けて来た薫への信頼がある。最終的に大君が結婚拒否を貫いたのは、薫との精神的愛情の永続性を信じるからである<sup>注⑩</sup>。人間の生において、その身体の永続性も関係の永続性も現実にはあり得ないことである。しかし、彼女は結婚拒否によって、薫との精神的愛の永続性に希望を見たのである。

### おわりに

『無名草子』の「あはれなること」は、物語内で亡き人を悼む場面を中心に取り上げているが、宇治大君の場合は、当人の気持ちにも想像をめぐらす<sup>注⑪</sup>。

また、宇治の姉宮の失せこそ、あはれに悲しけれな。薫大将、限りあれば、我が御衣の色は変はらぬに、かの御方の心寄せわきたりし人々、いと黒く着換えたるを見て、

紅に落つる涙のかひなきは形見の色を染めぬなりけり

向かひの寺の鐘の聲、枕をそばだてて、「今日も暮れぬ」とあはれにおぼしつづけて、生き出でてもものしたまはましかば、などあるところ。また、遣水のほとりの岩にしりかけて、とみにも立ちたまはで、

絶え果てぬ清水になどか亡き人の面影をだにとどめざりけむ

とのたまふこそ、いみじくあはれにうらやましけれ。かかる人持ちてこそ、死なむ命もいみじからめ、とおぼゆ。(二二二頁)

紅の涙を流し、生き返ってくれたらと願ひ、どうして面影だけでもとどめおかなかつたかと悔いる。死に遅れた人の思いには共通する部分があるものだが、そのように慕われる死者を「うらやましい」と書いたのは、大君に対してだけである。

結婚拒否の姫君は世の中の枠組みに入らず、薫と肉体的に結ばれることはなかったが、強い精神的紐帯を得た。永遠に慕い続ける恋人という薫との縁を手に入れたのである。そんな恋人を持ってこそ、いずれは死ぬ命だとしてもすばらしい。『無名草子』内の語り手たちはそう評したのである。

### 注・参考文献

- ① 拙稿／安道百合子 『源氏物語』紫の上他場面教材化への一視点―「消えゆく露」表現に着目して― 『日本文学研究』五〇号(梅光学院大学日本文学会二〇一五)。
- ② 『源氏物語』の本文引用は、小学館新編日本古典文学全集本により、引用末尾に(巻名・巻数・頁数)を示した。
- ③ 石田譲二「源氏物語における四つの死」『源氏物語論集』(桜楓社一九七二)所収。
- ④ 安藤享子「死ぬ」およびその同意語 I―源氏物語を中心に―(『中古文学』一九六九)。
- ⑤ 新編日本古典文学全集『源氏物語』の訳・頭注による。
- ⑥ 用例は『源氏物語索引』(岩波書店新日本古典文学大系)と、小学館新編日本古典文学全集本とで確認し、校訂によって「枯」表記を宛てる用例を掲げた。なお、大君の死の場面については、新大系本が底本とする大島本においては「ものかくれ行」本文となっており、孤例。当該本文の異同の状況を鑑み、「枯れゆく」と校訂した新全集本に従った。また、風景描写が作中人物の心象風景に及ぶ場合を検討に含めるため、「木枯らし」「霜枯れ」等の複合語を含めた。
- ⑦ 新編日本古典文学全集本の頭注・補注には、漢籍からの引用を指摘したうえで、「冷たい時雨の降る日の、故人をしのぶ人々の傷心賦である」との記述があり、さらに「平安貴族社会の読者に、これを受け入れるだけの傷心の思いが底流としてあるのだろう。勅撰集に「哀傷歌」の部立の伝統がある」とある。
- ⑧ 新日本古典文学大系本の脚注には、「常夏」「床」の掛詞。「塵をだに据ゑじとぞ思ふ咲きしより妹とわが寝る常夏の花」(古今集・夏・凡河内躬恒)による」とある。また新編日本古典文学全集本の頭注は、同歌引用に加えて「(こ)では「常夏」で亡き妻が詠まれたことになる。」とある。
- ⑨ 『源氏物語引歌総覧』(鈴木日出男著 風間書房二〇一三)をはじめ、先行注に指摘がある。
- ⑩ 和歌の引用は『新編国歌大観』により、歌番号・歌のあとに(歌集名・巻・作者/詞書)を提示した。歌集名については省略した場合がある。
- ⑪ 詞書の「とひたまへる」の敬語から、主語は倫子で出仕後の歌とされる。また、前歌の初句「垣ほあれ」が夫宣孝の没後を示すか。諸説あり。
- ⑫ 「枯れゆく」の研究史をたどれば、三角洋一『宇治十帖と仏教』(若草書房二〇一一)は、『法華経』「枯槁」「枯竭」から、大君は人間の四苦を背負って死んでいくとされ、また松岡智之「現世執着と女性美―大君物語の場合―」『国語と国文学』七五巻八号(一九九八)は『白氏文

- 集』「婦人苦」の「枯死」に関わると指摘されている。
- ⑬ 咲本英恵『源氏物語』宇治大君の死の表現―「もののかれゆくやうにて」を中心として―『表現研究』九五号（表現学会二〇一二）は、「かれゆく」の直喩が、「魂が抜けていき、生前の姿を残しながら死んでいく」ことを意味すると述べている。本稿は、薫と大君双方の視点から捉える景の喩として論じた。
- ⑭ 三村友希「死と再生の『源氏物語』宇治十帖―枯れ急ぐ大君と朽木願望の浮舟」『日本文学』六六号（二〇一七）は、宇治十帖の植物表現全体の問題として論じた。
- ⑮ 池田節子「大君―結婚拒否の意味するもの―」『源氏物語作中人物論集』（勉誠社一九九三）所収。
- ⑯ 武原弘『源氏物語の認識と求道』（おうふう一九九九）は、「大君はいま、死と出家を見つめている。そこに永遠があるからである。：結婚して滅びの愛を見るよりも、死か出家かによって現在の愛を永遠のものとして完成させよう。これが、大君の主体的選択によって生き辿られてきた結婚拒否というけわしい道程の帰結点であった。」と述べた。
- ⑰ 『無名草子』の本文引用は、小学館新編日本古典文学全集本による。

令和七年十月二十二日受理  
あんどどうゆりこ・さのみなみ

# A Study on the Symbolism of Death in Uji no Ōkimi's “*Kareyuku*”

—An Examination of the Usage of “Wither” in The Tale of Genji—

ANDOU, Yuriko and SANO, Minami

## Abstract

The death of the Lady of Uji in The Tale of Genji is depicted through Kaoru's gaze as “like things withering away.” This study clarifies the uniqueness of this expression and discusses the symbolism conveyed by “wither away” through an examination of instances of “wither” within the narrative. In Part III, instances of “wither” represent the ongoing process of decay, serving as a symbol for the Princess. Furthermore, in the waka poem, it functions as a pun on “departing.” Thus, for Kaoru, it expresses the bitter frustration of being unable to hold onto his lover, whose life is fading away and leaving him, even as her body remains before him. This later became the impetus for his desire for a “doll.” On the other hand, viewing from the perspective of the Princess, who refused marriage, the plants symbolize her own aging body and life. Just as withering plants find hope in the return of spring, her death without marriage functioned as a symbol of the enduring spiritual love she shared with Kaoru.

**【Key words】** The Tale of Genji, metaphor for death